

【研究論文】パラグラフ・ライティング教材の研究

—高大接続教育を視野に入れて—

竹村 知洋

日本大学大学院総合社会情報研究科後期課程

Research of paragraph writing materials —With a view to high school-university connection education—

TAKEMURA Tomohiro

Graduate School of Social and Cultural Studies, Nihon University

The purpose of this research is to explore teaching materials that can utilize paragraph writing techniques for teaching Japanese writing. First, I will describe the background of the research is presented, including the revision of the Course of Study, first-year education at universities, and the method of grading. Second, this study provides materials for learners to write logical sentences, using paragraph writing techniques. Finally, we examined the problems and future challenges of writing education in Japan are examined.

1. 研究目的

本研究の目的は、パラグラフ・ライティング (Paragraph Writing) (以下、PW) の作文技術を日本語の文章教育に活用できる教材を研究・開発することである。本研究では、この教材を PW 教材と呼ぶ。教材とは、教育者の指導や学習者の自学習に使用できるテキストを指すものである。

1.1 PW を活用する目的

PW を活用する目的は、PW の作文技術を学ぶことにより、日本語で論理的な文章を書くためである。論理的とは、書き手の主張の理由や根拠が明確であり、筋道が通っていることを指し、大学等で論述式の答案を作成する際に求められる技能の一つである。

PW は主に米国の教育機関でアカデミック・ライティングの技術を指導するために発展してきた手法である (高橋ら、2021、267 頁)。倉島によると PW は、「論理的な文章を書くための、世界標準の書き方」である (倉島、2012、3 頁)。PW を習得することに

より、書き手の主張を読み手が納得する効果的な文章が書けるようになるのである。

PW は、欧米の教育現場で指導されている言語技術 (Language arts) ¹ の一部である。しかし現代日本においては、PW を含め言語技術による日本語の文章教育が行われているとはいえない状況にある。日本に言語技術を導入するため「つくば言語技術研究所」を設立した三森ゆりかによると、言語技術とは「言葉を有効に使いこなすためのスキル」であり、「世界の多くの国々で母語教育として指導されている世界基準の言語教育」である (三森、2013、3 頁)。その内容は非常に似通っており、「言語教育を共有することは文化や言語の相違を超越して、発想や表現方法に共通の基盤を持つことを意味」するとしている (三森、2013、4 頁)。つまり、PW を習得することは国際的な作文技術を学ぶことにもつながるのである。

1.2 PW 教材を研究・開発する目的

PW 教材を研究・開発する目的は PW を学び、日本語の文章教育に生かすためである。具体的に本研究は高大接続教育を視野に入れているため、日本語の文章教育として大学のレポートや論文で要求される論理的な文章の書き方を指導することを想定している。そのため教材の使用者は、主として高校生若しくは大学 1 年生であり、それを指導する教員も含んでいる。

PW 教材を研究・開発する理由は、管見の限り PW を活用して日本語で文章を書くための適切な教材が見当たらないからである²。とはいえ、PW の意味や内容を解説する本は複数出版されている³。しかし PW の作文技術を身につけるためには、その意味や内容を知るだけでは不十分である。例えば、論理的な文章を書くことを指導する高校国語科の論理国語の教科書でも PW は紹介されているが、その記載はわずか半ページに過ぎず、パラグラフ本来の意味や内容の説明は不十分である。(坪内ら、2022、113 頁)。PW を使って文章を書くためには、何度も繰り返し書くことを練習することが必要であり、そのための教材が必要なのである。

そして日本語による PW 教材がない理由は、元来 PW は英作文の文章構成法であり、日本語の作文技術に応用されてこなかったためである。そのため PW による英作文の教材は多数あるにもかかわらず、日本語で PW を修得するための適切な教材は見当たらないのである。英作文には英作文特有の書き方があるため、そのまま日本語の文章に転用することはできない。PW の形式を使って、日本語で実際に書くことを反復して練習するための教材が必要である。

日本語の伝統的な文章構成法は、起承転結である。PW と起承転結の違いは、結論の位置である。PW は最初に結論を示すが、起承転結は最後に示す。レポートや論文で求められる論理的な文章は、最初に結論を述べ、そのあとにその理由や根拠を示すことが有効である。最後まで結論が分からない起承転結による文章構成は、専ら詩や小説などで使われているが、レポートや論文などの論理的な文章を書くには不適切なのである。

以上をまとめると本研究の目的は、PW を習得し、論理的な文章を書く作文技術を身につけるため、日

本語による PW の教材を研究・開発することである。教材は高大接続教育を視野に入れ、高校生や大学 1 年生が大学での学びを円滑に進めることを目指したものである。

2. 研究背景

2.1 文部科学省による学習指導要領改訂の基本方針

文部科学省が平成 31 年に告示した学習指導要領の改訂の基本方針のひとつとして、育成を目指す資質・能力を明確化し、それを 3 つの柱として整理したことが挙げられる。3 つの柱とは「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」(以下、思考表現力)、「学びに向かう力、人間性等」である。これに伴い高校においても 3 つの柱に即した 3 観点による観点別評価を実施することとなった。石井は 3 観点のなかでも評価の本丸とされるのは思考表現力であり、その充実を図ることが必要であるとしている(石井、2023、3 頁)。本研究の文章教育によって育成を図る主たる学力も、3 観点の本丸とされている思考表現力である。

言語教育については、学習指導要領第 1 章総則第 1 款 2 (1) で「生徒の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実する」とし、言語教育が学習の基盤であることを示している(文部科学省、2018、38-39 頁)。特に思考表現力については、その力を育成する過程として「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現」するとしており、文章教育の必要性を示している(文部科学省、2018、41 頁)。筆者は現在(2025 年)日本大学豊山高校に勤務し公民科を担当しているため、特に公民科の教育内容に即した文章教育を考察し、大学における法学・政治学といった科目への接続を想定することとする。公民科における思考表現力は、高等学校学習指導要領解説公民編で次のように規定されている(文部科学省、2018、24 頁)。

現代の諸課題について、事実を基に概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、解決に向けて公正に判断したりする力や、合意形成や社会参画を視野に入れながら構想したことを議論する力を養う。

公民科において求められる思考力は「多面的・多角的な考察力」である。それは学習者が対象とする社会的事象を様々な側面や角度から考えることを意味している。表現力は「議論する力」とされ、資料等を適切に用いて論理的に示すことが求められている。特に公民科の各科目（公共、倫理、政治経済）の課題探究学習における学習活動の内容では、課題について調べたり考えたりした内容を報告書やレポートにまとめるなど、論述による表現力を身につけることとしている。以上のように今回改訂された学習指導要領は、思考表現力の育成を図るために文章教育をはじめとした言語活動を重視しているのである。

改訂の基本方針のもうひとつは、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進である。学習指導要領では、特に高校教育が大学入試や資格の在り方等の外部要因でその教育の在り方が規定されており、目指すべき教育改革が実現しにくいことを指摘している。今回の改訂はその実情を踏まえ、高校・大学・大学入試の一体改革を図る高大接続改革とともに授業改善を推進するとしている。

大学入試改革の取り組みとしては、従来の大学入試センター試験（以下、センター試験）を2021年から大学入学共通テスト（以下、共通テスト）に変更したことである。大学入試センターによると、共通テストの問題作成にあたっては、知識・技能を活用し思考表現力を発揮して解くことが求められる問題作成を行うこととしている。

センター試験から共通テストへの大きな変更点は、国語と数学に記述式問題を導入することを検討していたことである。文部科学省はその導入の理由として、「より主体的な思考力・判断力の発揮が期待できること」、「文や文章を書いたりすることを通じて思考のプロセスがより自覚的になることでより論理的な思考力・表現力の発揮が期待できること」、「目的に応じて適切な表現様式を用いた表現力の発揮ができること」などを挙げている（文部科学省、2021）。つまり文部科学省は、選択式問題よりも記述式問題の方が受験者の思考表現力をよりの確に評価できるとしていたのである。

このような大学入試改革に伴い、日本大学付属高校の生徒が受験する基礎学力到達度テスト（以下、基礎学力テスト）にも記述式問題が出題されることとなった。それを受け筆者を含めた各教科の教員は授業において、記述式問題に対応した文章教育を行うこととなった。大学入試改革とともに授業改善がスタートしたのであるが、それはわずかな期間のうちに終えることとなった。それは2019年に当時の萩生田文部科学大臣が共通テストに記述式問題を導入することを見送るという判断をしたためである。

萩生田大臣が記述式問題の導入見送りという判断に至った理由は、採点精度の問題である。当初大臣は、採点事業者による質の高い採点が確保できると発言していた。しかし最終的には採点ミスや自己採点との不一致をゼロにすることはできないという判断に至り、記述式問題の導入は見送られることとなった。（萩生田、2019）。そのため共通テストや基礎学力テストはすべて従来通りのマークシートによる選択式問題となり、それと同時に筆者を含めた各教員の授業からも文章教育への試みは姿を消したのである。しかし、記述式問題を導入しようと試みたことは思考表現力を育成するには文章教育が必要であることの証左であり、文章教育にあたっては採点や評価における精度を確保する必要があることを示唆しているのである。

2.2 大学の初年次教育に見る文章教育の必要性

大学教育においては、文章を書くことが求められる。その理由は、大学における初年次教育²の取り組み状況を見れば明らかである。文部科学省が2019年に実施した「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について」の調査によると、令和元年度に初年次教育を実施している大学は97.3%であり、そのうち「レポート・論文の書き方などの文章作法を身につけるためのプログラム」を取り入れている大学は91.4%である。この数値は初年次教育の具体的な内容のなかで最も高い数値となっている。

平成27年度と同調査でこの値は88.6%であったため、4年間で文章を書くことがより重視されるようになっていくことがわかる。また、同調査の「履修指導や学習支援制度等の取組状況」によると「ライ

ティング・センター等、日本語表現力を高めるためのセンター等の設置」をしている大学は、平成 27 年度に 9.4%、令和元年には 13.1%である。全体としては少数であるが、この調査結果からも日本語の表現力を育成する必要性が益々高まっているといえる。

2.3 インタビューから得られた大学における成績評価の方法

大学における成績評価の実態を把握するため、大学教員 5 名にインタビュー調査を実施した。高大接続教育を考え、インタビューの対象者はすべて日本大学に所属する教員とした。なお、本研究は日本大学研究倫理委員会の審査を経て実施している（承認日：令和 6 年 11 月 28 日、承認番号：第 HP24S007 号）。

(1) 対象者と調査方法

教員 5 名のうち、2 名は法学部、3 名は危機管理学部の所属である。調査方法は対面で、それぞれ約 1 時間程度の半構造インタビューを行った。場所は教員の研究室又は会議室である。

(2) インタビュー内容

インタビュー内容は、①担当している授業と履修している学生数、②成績評価の方法について、③レポート・論述試験の採点方法について、④学生の学力について、⑤高校生に求める学力について、である。

(3) 倫理的配慮

インタビューにあたり研究概要、研究参加が任意であること、収集した情報は研究目的のみで使用する、研究結果の公表は個人が特定できないようにすることなどを書面及びインタビュー当日に口頭で行ったうえで、対象者の自由意思に基づき、参加承諾書への署名を得た。

(4) インタビューから得られた大学における成績評価の実態

表 1 インタビューから得られた成績評価の方法と文字数

教員名	成績評価の方法	文字数
教員1	論述試験	A4 1枚程度
教員2	論述試験	800～1200
教員3	レポート	1200
	リアクションペーパー	100～200
教員4	論述試験	800～1000
	小テスト	100
教員5	レポート	600～1500
	リアクションペーパー	200～300
	選択式問題	—

成績評価の方法として、教員 1・2・4 が 800～1200 字の論述試験を実施しており、教員 3・5 が 600～1500 字のレポート提出を課していた。5 名すべての教員が論述試験又はレポートによって成績評価を行っているという結果が得られた。また、教員 3・5 は毎回の授業で 100～300 字のリアクションペーパーを提出させており、教員 4 は 100 字の小テストを実施していた。この結果、大学の成績評価においては論述試験やレポート、リアクションペーパー等によって、文章を書くことが求められると考えられる。

また学生の文章能力については、次のような意見が得られた。「最近感想文すら指導されていないのではないか。高校時代の文章指導について聞いても反応が薄い。」(教員 1)、「パソコンの使い方はうまいが、手書きは苦手のようなのである。文章能力は昔から現在まで伸びていないとはいえない。」(教員 2)、「個人差が激しい、論旨不明な漫然とした文章を書く学生がいる一方、理路整然とした文章を書く学生もいる。そのような学生は高校時代に何らかの文章作成のトレーニングを受けていたのではないのか」(教員 3)、「段落がつくれない。意味の構造化ができていないのだろう。主語と述語の関連性が不明な文章が多い。」(教員 4)、「学生が自分自身で書いているか、不明である。書式・形式ができていない」(教員 5)。

これらの意見から、レポートや論文で要求される論理的な文章能力が学生に不足していることは明らか

かである。今回の調査結果は、高大接続を円滑に進めるために、高校時代に文章教育を行うことの必要性を示唆するものである。

3. PW 教材作成の方法

PW 教材作成の方法は、英語圏で使用されている標準的な英作文の教材をもとに、他の教材から PW の知見を加えていくというものである。最も参考にしたのは『Longman Academic Writing Series』(2023)である。このシリーズを選択した理由は、対象者が高校生から大学生であり、文章の作成から研究論文の執筆までライティング・プロセス全体を網羅しているため、本研究にとって最適であると判断したためである。教材を補完するものとして、英語圏や日本の英作文用の参考書、邦文の PW 解説書を複数参照した⁵。また教材作成の際には、勤務校における米国出身のネイティブ英語科教員のチェックを受けた。

PW の参考書・解説書を選択する際には、筆者の主観的判断が働いてしまうため、一定の恣意性が認められる。永井が指摘しているように、PW の基本的なルールは文献や解説書により共通している部分と異なる部分がある(永井、2023、2 頁)。永井は日本語パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けて、1960 年代から 2022 年までに出版された PW に関する 61 件の文献を分析し、PW の 10 の基本ルールを抽出・整理した(永井、2023)。作成した教材は、原則としてこの 10 の基本ルールに従ったものとなっている(基本ルールにはなかったまとめ文に関する事項を付け加えている)。そのため本教材は、PW の基本的事項を一般化しており、その作文技術を習得できるものとする。

4. PW 教材

4.1 パラグラフの説明と練習問題

4.1.1 思考トレーニング⁶

思考トレーニングは、文章作成に先立って行うものである。日本では初等教育から感想文を書く練習をしているため、論理的な文章を求めていたとしても、自分の主観に基づく感想文になる傾向が強い。大学のレポートや論文は、感想文とは異なる思考表現力が要求される。そのため論理的な思考を養うた

めに、問いに対する答えを明確にすること(問答ゲーム)や抽象化と具体化、事実と意見を区別する練習を多数行う。

これにより結論を先に述べることや主張の理由や根拠を明示すること、5W1H を意識する思考力が鍛えられる。教育者が授業で実践する場合には、ペアで組ませて対話することも有効である。以下に思考トレーニングの例として、事実と意見を区別する練習問題を示した。これは任意に作成した文章に対して、事実＝客観、意見＝主観の区別をつける練習である。この思考トレーニングにより論理的な文章作成に必要な、客観的事実に基づき自分の意見を説明する力が鍛えられるのである。

【事実と意見を区別する練習問題の例】

- () 内は解答である。
- ・日本の国土は狭い。(意見)
- ・日本の初代内閣総理大臣は、伊藤博文である。(事実)
- ・今日の天気は雨である。(事実)
- ・昨夜の夕食は美味しかった。(意見)

4.1.2 パラグラフとその構造の説明

パラグラフとは一つの内容を説明した文章の集まりである。パラグラフは、主題文(topic sentence)、補助文(supporting sentence)、まとめ文(concluding sentence)の3部分から構成される。

4.1.3 主題文の説明と練習問題

主題文はパラグラフの中心的な主題(topic)を示す役割をもつ。注意事項は全体的になりすぎたり(too General)、詳細になりすぎたり(too Specific)しないことである。PW 教材中に不適切な主題文の例を示し、練習問題に取り組む。PW 教材では、様々な主題文を書く問題を複数用意している。一つの文章を作成するたびに、ピアレビュー(Peer Review)を行う。生徒同士でピアを組み、お互いに評価をし、相手に指摘された部分を修正する。ピアレビューは複数回繰り返す。ピアレビューと修正を行うことは、これ以降の練習問題においても同様である。

以下に示したのは、主題文の練習問題である。この問題は補助文とまとめ文だけが示されているため、その内容をもとに【 A 】に入る主題文を解答する形式である。この文章で示した主題はインターネットの機能に関するものであるため、それを説明する主題文が書けるようになることがねらいである。この練習問題の解答例としては、「インターネットの利用による三つの機能は、次の通りである」という文章が考えられる。

【主題文の練習問題の例】

【 A 】。第一に、情報を収集する機能である。キーワードを入力して検索することで、知りたい情報を集めることができる。第二に、情報を発信する機能である。例えば自分のつくった HP などを世界中に公開することができる。第三に、情報を共有する機能である。メールのやり取りや同じサイトにアクセスすることで、様々な人と情報交換をすることができる。以上のように、インターネットを利用することで、情報の収集や発信、共有する機能を利用することができるのである。

4.1.4 補助文の説明と練習問題

補助文は読み手が納得し、理解できるように主題を補うものである。補助文では、具体的 (Specific) に、事実に基づく理由や根拠を示すことである。重要なことは第一に、内容に統一性 (unity) をもたせることである。補助文に主題とは異なる話題を入れてはならない。第二に、文章の順序に一貫性 (coherence) をもたせることである。一貫性をもたせるには重要性や時系列に従って書くことである。練習問題は、主題とは異なる話題が入っている文章を見つける問題や適切な補助文を選択する問題がある。

さらに接続表現 (transition signals) を適切に使用することが重要である。接続表現は文章と文章をスムーズにつなげる役割をもつ。接続表現には、順序 (第一に、第二に、第三に等)、順接 (さらに、加えて、そのうえ、すなわち、要するに等)、逆説 (しかし、ただし、最も、一方、それに対して等) がある。以下

に示した練習問題の例は、【 B 】に適切な補助文を選択する問題である。解答は②である。

【補助文の練習問題の例】

日本にはユネスコによって登録された多くの世界遺産がある。第一に、5 つの自然遺産である。例として、秋田県の白神山地や屋久島がある。第二に、【 B 】。以上のように、日本には合計すると 26 もの世界遺産が登録されているのである。

① 人類共通の宝として、現代に生きる世界の人々が将来の人々に引きついでいきたい文化財がある。

② 21 の文化遺産である。例として、法隆寺や富士山がある。

4.1.5 まとめ文の説明と練習問題

まとめ文は、主題文と補助文を要約する役割をする。冒頭に接続表現を用い、主題文を別の言葉で言い換える。注意事項は、主題とは異なる新たな話題を入れないことである。以下に示した練習問題は、ラーメンの種類に関する文章であり、主題文と補助文を読み、空欄部【 C 】にまとめ文を作成する形式である。この練習問題の解答例としては、「以上のように、日本にはしょうゆや塩、味噌、豚骨を使った様々なスープのラーメンがある。」という文章が考えられる。

【まとめ文の練習問題の例】

日本には様々な調味料や材料を使った味のラーメンがある。まずは、しょうゆラーメンである。スープは透明に澄んだ薄茶色で、その味はあっさりとしている。次に、塩ラーメンである。塩ラーメンのスープはしょうゆラーメンよりも透明であり、見た目も味もシンプルである。さらに、味噌ラーメンである。味噌ラーメンのスープはコクがあり、濃厚である。最後に、豚骨ラーメンである。豚骨ラーメンのスープは豚の骨を使ってダシをとるため、白く濁っておりクリーミーである。【 C 】。

4.1.6 その他注意事項

文章作成にあたり、書式や形式、読みやすい文章の作成方法について説明する。パラグラフの始まりは一文字下げること、文体をそろえること、主語と述語の関係を明確にすること、短い文章にすること、感想文にならないことなどである。近年、段落を設けることがない、区切れのない非常に長い文章を書く、話し言葉と書き言葉の区別がついていないなど文章の基本を身につけていない文章を目にすることが多いことから取り入れた注意事項である。

4.2 パラグラフ作成の準備

4.2.1 テーマの設定

ここでのテーマは主として公民科で扱う内容を設定する。テーマは公民科に関連したものであるが、知識を活用し思考表現力を育成する設問としては、汎用性の高いものである。正解が一つに絞られないものであり、自分の考えを理由や根拠とともに明確に述べることを求めるテーマとした。

【テーマの例】

- ・投票の義務化に賛成か、反対か。
- ・死刑制度に賛成か、反対か。
- ・安楽死を認める法制化に賛成か、反対か。
- ・若年層の投票率を向上させる方策は何か。
- ・満員電車を解消する有効な方法は何か。

4.2.2 ブレインストーミング (brainstorming)

ブレインストーミングは、テーマについて書く材料を集めるための方法である。方法としてはクラスタリング (Clustering) やリスト化 (listing order) 等がある。いずれも与えられたテーマに関して、知っていることや経験したことを思いつくままに自由にあげていく方法である。ブレインストーミングのポイントは、質よりも量を重視し、可能な限り多くの関連事項をリストアップすることである。表 2 の教材を作成するにあたって生徒に示したテーマは、「投票の義務化に賛成か反対か」である。表 2 の教材は、投票の義務化に対するメリットとデメリットを挙げ、事実か意見かを区別するものである (メリット・デメリットに記載されている内容は、紙面の都合上、文章を簡略化している)。

表 2 賛否のテーマのリスト化に使用する教材

論理的な思考 その① 「リスト化」する

事実or意見	メリット	事実or意見	デメリット
事実	投票率増加	事実	コスト増加
意見	意見の反映	意見	権利侵害
事実	正当性向上	意見	質低下
意見	民主制向上	事実	罰則の問題
意見	公平性獲得	事実	反感増加
意見	責任感向上	意見	行政拡大

4.2.3 アウトライン (outline) の作成

アウトラインは文章作成の計画である。ここでは、ブレインストーミングによって集めた材料を整理する作業を行う。思考を整理し、パラグラフのアウトラインを作成する。ブレインストーミングで出てきた材料をもとに判断し、理由とともに自分の立場を定める。さらに、理由を支える具体的な根拠や事例を調査する。根拠や事例は、事実を挙げる必要がある。表 3 は、投票の義務化に賛成する立場の例を示している。

表 3 アウトライン作成に使用する教材

論理的な思考 その② リストを「整理」する

自分の立場		賛成 or 反対
重要度	接続表現	理由と根拠・事例
1	第一に	理由 投票率向上
	例として	1 オーストラリア
	さらに	2 スイス
2	また	3 新聞アンケート
	第二に	理由 民主主義強化
	まず	1 正当性の向上
3	次に	2 大学での研究
	加えて	3 不平等の是正
	第三に	理由 世論調査
3	具体的に	1 賛成意見多数
	最後に	2 政治的関心
		3

4.3 パラグラフの作成と評価

4.3.1 パラグラフの作成

パラグラフを作成する教材は、掛け線のための白紙である。アウトラインに則り、パラグラフの構造に従った文章構成にする。教材はピアレビューや採点者がコメントしやすいように、行間や左右に余白を設ける。ピアレビューや指導者からのコメントを入れることを考えると、パソコンよりも紙を使用した方が効率的である。ピアレビュー後に修正し、最終的には指導者の評価を受ける。

4.3.2 パラグラフの評価

ピアレビュー、指導者の採点の際にはルーブリック評価を用いる。ルーブリック評価を用いる理由は、文章の採点を可能な限り客観的に行い、公平性を確保するためである。ルーブリック評価には、学習者に評価の基準と内容を示すという役割もある。評価表はパラグラフの形式に従い、項目毎に点数化した。点数は、難易度に応じて筆者が考案したものである。文章の採点においては、客観性や公平性を確実にすることについて一定の限界がある。筆者はすでに本教材を用いた指導を実践しているが、評価に関しては今後も検討を要する課題であると考えている。PWによる文章教育とその成果に関する実証的研究については別途報告することとする。

表 4 ルーブリック評価表

(1) 主題文	点数	(2) 補助文	点数
①主題をひとつ示している	8	①具体的な根拠を示している	12
②全体的すぎでない	8	②内容に統一性がある	12
③詳しすぎでない	8	③順序に一貫性がある	12
(3) まとめ文		(4) 形式・書式	
①主題をまとめる文である	8	①段落始め1文字下げる	1
		②「～だ」・「である」	1
②主題を言い換えている	8	③接続表現の適切な使用	3
		④主に能動態の文章	3
③新たな話題が入っていない	8	⑤主語と述語の明確な関係	4
		⑥文が短い文章	4

5. 日本の文章教育の問題点と今後の課題

5.1 「読むこと」重視の日本の国語教育

日本の文章教育の問題点は、「書くこと」よりも「読むこと」、つまり読解を重視したものとなっていることである。それはパラグラフと段落の違いにも表れている。日本ではパラグラフを「段落」と翻訳し同一視しているが、本来の意味や内容は異なるものである。(小西ら、2006、1411 頁)。木下によると日本語の文章にはもともと段落はなく、明治期に欧米から輸入されたものである(木下、1981、60-61 頁)。輸入によって日本の文章に段落が取り入れられたのであるが、その意味や内容までは正確に伝わらなかったと考えられる。パラグラフと段落が同様なのは、改行をするという形式だけである。学習者はまず、段落とパラグラフは意味や内容が異なるものであることを学ぶ必要がある。

パラグラフと段落が異なる点は、パラグラフが読み手を意識して「書くこと」を重視し、段落は書かれたものを「読むこと」を重視しているということである。パラグラフは一つの内容を一つの段落(パラグラフ)にまとめた、文章の書き方の技術である。

一方、段落は改行から改行までのひとまとまりとしての形式段落とそれを内容ごとにまとめた段落としての意味段落があり、意味段落は複数の形式段落を含むものとなっている(坪内ら、2022、3 頁)。段落は高校国語科において、文章を読解する際の着眼点として指導しており、作文技術として指導しているものではない。段落はパラグラフのように書き方を教えるものではなく、読み手が「書き手の意図を正確に把握する」ものとして指導されているのである(坪内ら、2022、113 頁)。段落がパラグラフ本来の意味を正確に輸入しなかったことも、日本で PW が教育されていない一つの原因といえるであろう。

5.2 大学入試という壁

今後の課題は、大学入試に対応しつつ、文章教育を行っていくことである。日本の文章教育が不十分である最大の原因は、大学入試の出題形式にある。共通テストや基礎学力テストはマークシートを利用した選択式問題中心の大学入試を実施しているため、高校はそれに対応した授業を展開することとなる。学習指導要領で「書くこと」が定められていても、

その優先度は下がらざるを得ない。大学の初年次教育で文章指導をする大学が増加しているのは、高校生の文章能力が不十分であることを示している。大学入試に記述式問題が出題されない限り、高校までの文章教育は、今後も不十分なものとならざるを得ないであろう。

選択式問題のみでは、思考表現力を育成することに一定の限界があると考ええる。共通テストは出題方法を工夫することにより、選択式問題であっても思考力を測る問題が出題されている。しかし正答が一つであるかぎり、いくら工夫しても出題者の意図に沿った一定の思考力を問うことしかできない。また選択式問題のみでは、表現力について評価することは不可能である。2019年に共通テストへの記述式問題の導入を見送った萩生田文部科学大臣の「各大学の個別選抜において記述式問題の活用に積極的に取り組んでいただきたい」という発言からもわかるとおり、大学入試において記述式問題が果たす役割は大きいのである。

共通テストへの記述式問題の導入が見送られた主たる原因は、採点精度の問題であった。マークシートは採点において効率性の高い方法である。それと比較し文章を採点するためには多数の人員と多くの時間がかかり、客観性や公平性を確保することも困難となる。記述式問題に関しては、採点精度の問題を解決しない限り、その導入は難しいであろう。採点精度の問題は高校の定期テストや高校入試においても同様であり、今後検討を要する課題である。採点精度については、文章教育に関して長い歴史を持つ欧米の仕組みを参考にすべきであろう。

注

1. 日本の近代教育史上初めて言語技術教育の体系をつくり、教育現場での実践を試みた人物が、物理学者の故木下是雄である。
2. 言語学の研究者である高崎経済大学の高松正毅は、学生の文章能力を向上させる有効な教科書がない理由を〈研究ノート〉「文章表現技術」の理論確立に向けて（高松、2003、175-176頁）において2点指摘している。第1は教科書という形態による制約、第2に執筆者の力量であるとしている。

3. 木下是雄『理科系の作文技術』、倉島保美『論理が伝わる「書く技術」』、三森ゆりか『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』、松浦年男・田村早苗『日本語パラグラフ・ライティング入門』、最上心瑛『論文・小論文の書き方パラグラフ構造による論理的な段落づくり』などがこれに当たる。
4. 初年次教育とは、高校から大学への円滑な移行を図り、主として大学新生を対象に作られた総合的学習プログラムである。高校における基礎学力の補習教育とは異なり、新生に最初に提供されることが意識されたものである。
5. 英作文の参考書については、主として受験対策用のテキストを参照した。
6. 三森が言語技術のトレーニングで推奨しているものである。

引用文献

- 倉島保美、2012、『論理が伝わる「書く技術」』講談社、3頁。
- 三森ゆりか、2013、『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』大修館書店、3-4頁。
- 石井英真、2022、『授業が変わる学習評価深化論 観点別評価で学力を伸ばす「学びの舞台づくり」』図書文化、3頁。
- 坪内稔典ほか16名、2022、『論理国語』数研出版、3頁、113頁。
- 文部科学省、2018、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』東京書籍、38-41頁。
- 石井英真、2022、『授業が変わる学習評価深化論 観点別評価で学力を伸ばす「学びの舞台づくり」』図書文化、3頁。
- 坪内稔典ほか16名、2022、『論理国語』数研出版、3頁、113頁。
- 文部科学省、2018、『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 総則編』東京書籍、38-41頁。

参考文献

- Laura, Le, Dréan. 2020. Great Writing. National Geographic Learning.
- Linda, Butler. 2023. Longman Academic Writing Series. Pearson Education, Inc.

Patricia, Murphy. 2023. AP English Language & Composition Premium Prep. The Princeton Review.
大矢復、2010、『大学入試英作文ハイパートレーニング自由英作文編』桐原書店。
今井康雄、2009、『教育思想史』有斐閣。
樺島忠夫、1980、『文章構成法』講談社現代新書。
木下是雄、1981、『理科系の作文技術』中公新書。
ケリー伊藤、2002、『パラグラフ・ライティング講座』KENKYUSHA。
公益財団法人 日本漢字能力検定協会、2021、『文章検 2 級対応 基礎から学べる! 文章力ステップ』公益財団法人 日本漢字能力検定協会。
小西友七・南出康世編集主幹、2006、『ジーニアス英和辞典第 4 版』大修館書店。
三森ゆりか、1996、『言語技術教育の体系と指導内容』明治図書。
高橋良子・鈴木沙季・野田直紀・ジェーゴエリックハジメ・飯島淳・日臺智明、2021、「医学英語ライティング教育 9：医学英語の授業におけるパラグラフ・ライティング教育の試み 2 サポートに関する問題」日大医誌。
高松正毅、2003、「文章表現技術」の理論確立に向けて」高崎経済大学論集第 45 巻第 4 号。
独立行政法人大学入試センター、2025、「大学入学共通テストの仕組み等」。
https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_gaiyou/shikumi_un ei.html (2025/3/31 閲覧)
永井敦、2023、「パラグラフ・ライティングの基本ルール：日本語パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けて」神戸大学留学生教育研究紀要論文。
松浦年男・田村早苗、2022、『日本語パラグラフ・ライティング入門』研究社。
最上心瑛、2023、『論文・小論文の書き方 パラグラフ構造による段落づくり』星雲社。
文部科学省、2018、『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 公民編』東京書籍。
文部科学省、2020、「6. 記述式問題の経緯」報告書。
https://www.mext.go.jp/content/20201126-mxt_daigakuc02-000011142_8.pdf (2025/3/31 閲覧)
文部科学省、2021、「令和元年度の大学における教育

内容等の改革状況について」文部科学省高等教育局、大学振興課大学改革推進室。

https://www.mext.go.jp/content/20211104mxt_daigakuc03-000018152_1.pdf (2025/3/31 閲覧)
渡辺哲司編著・松濤誠之著、2021、『木下是雄と学習院「言語技術の会」』株式会社インプレス R&D。

(Received: August 20, 2025)

(Issued in internet Edition: September 1, 2025)